

「アクル」についての考察

富士原 伸弘*1

Consideration of "Akuru"

Nobuhiro FUJIHARA

Abstract

The "Akuru", which is a monster that appeared in Japanese mythology. However, "Akuru" does not appear in the Kojiki and Nihon Shoki. In this paper, we discuss what is a "Akuru".

Keywords : Japanese mythology, Kojiki

一 はじめに

前稿「讃留霊王伝説についての考察」において、香川県の伝承として存在する「讃留霊王の悪魚退治」に関する『香川叢書』所収の諸本について報告した(注1)。そこで扱った「讃留霊王の悪魚退治」の概略は、倭建命(またはその子、讃留霊王など)が、瀬戸内海で悪事を働いた「悪魚」を、坂出の地で退治するという内容である。

最近では、乗松真也氏が「悪魚」退治伝説にみる阿野郡沿岸地域と福江の重要性」において、讃留霊王の悪魚退治物語の要素を整理し、物語の中に現れる地名と実際の地理についての詳細な分析を行っている(注2)。

「讃留霊王の悪魚退治」は、誰が退治するのかなど様々な異伝が残っており、どのような視点から分析するのかわからず、異なる扱いが可能となる興味深い題材である。

本稿では、退治されるのが「悪魚」・「怪魚」・「大魚」であることが諸本において共通している事に着目し、古伝説そのものを読み解いていく作業からいったん離れ、この「悪魚」が現代までどのように人々に享受されてきたのかについて、新しい視点から「悪

魚」についての考察を進めて行きたい。

二 現代の資料

1963年に公開された東映動画の劇場用アニメ映画に、『わんぱく王子の大蛇退治』という作品がある(注3)。このアニメ映画は「日本神話」がベースとなっている。以下にその内容を紹介する。

①主人公はスサノオという少年である。父のイザナギ、母のイザナミ、兎のアカハナや虎のタロウ達と仲良く暮らしていた。

②そんなある日、母のイザナミが亡くなりハハガ国へ行ってしまった。スサノオは父の反対を振り切って、アカハナとともにハハガ国を目指して船で海へこぎ出していく。

③航海を続けるうち、怪魚アクルに襲われる。アクルを退治したスサノオは、海の神ワダツミにヨルノヲス国へと案内される。そこはスサノオの兄ツクヨミが支配する国だ。しかし、ツクヨミはハハガ国への行き方を答えてはくれなかった。

④次に火の国へたどり着いた二人は、火の神に

*1 香川高等専門学校 詫間キャンパス 一般教育科

苦しめられていたタイタン坊達を助けた。改心した火の神からアメノトリフネをもらい、仲間となったタイタン坊とタカマガハラを目指す。

⑤タカマガハラはスサノオの姉アマテラスが支配する国である。ここでスサノオは数々の失敗をしでかし、アマテラスの家来達と大げんかになってしまう。それを見たアマテラスは天の石屋に閉じこもってしまう。スサノオはオモイカネ、タヂカラヲ達とともにアマテラスを石屋から連れ出すことに成功したが、タカマガハラにはいることができず、イズモへと向かうことになった。

⑥イズモでスサノオは、母イザナミによく似た、クシナダ姫と出会った。クシナダ姫とその両親は、ヤマタノオロチという怪物に苦しめられていた。スサノオはネズミの助言を聞いて、空を飛ぶアメノハヤコマを手に入れ、ヤマタノオロチ退治を成功させる。そうしてクシナダ姫と二人で、このイズモを素晴らしい国にすることを決意するのだった。

日本神話としておなじみの要素がいくつか組み合わせられ、記紀神話とは異なるものとなっているが、③で登場する海の怪物「アクル」に注目したい。退治するのは「スサノオ」であって、「讃留霊王」ではない。しかし、記紀における須佐之男命の物語には「アクル」のような海の怪物を退治する話は見当たらないのである。

「タイタン坊」などアニメ独自の登場人物も存在しているが、大国主命が根の国の試練において「ネズミ」に助けられているように、日本神話に存在するモチーフがアニメに転用されているケースもあるようだ。「アクル」は「讃留霊王」伝説に見える「悪魚」を再利用したものではないかとも考えられるのである。

この「アクル」と「悪魚」との結びつきに注目してみると、漫画家の水木しげるが「妖鬼化ムジャラ 完全版 2」四国・中国 I において、「大魚悪樓」として次のように書いているのが見つかった(注4)。

『日本書紀』や『古事記』に書かれている悪神で、日本古代の幻獣である。日本武尊が九州地方の熊襲を平定しての帰り、吉備国(岡山県)の穴海で、悪神を退治したというものである。この悪

神こそ、大魚悪樓なのである。通りかかる船をひと飲みにしてしまうほど大きく、勇敢にも日本武尊は暴れ狂うこの巨大魚の背に乗り、自慢の剣を振ったという。この話は、スケールの点でも、須佐之男の八岐大蛇退治と双壁ではないだろうか。日本武尊はこの吉備穴海の悪神以外にも、各地で悪神とよばれるものたちを退治している。

さて、こうした伝承に登場する幻獣の正体を詮議してみるのも一興であろう。この悪樓の場合、特定の種類というよりは、特定の個体を指すようである。そのことから、群れていず、回遊性がなくて一か所にすみついている魚であることがうかがえる。モデルになった魚があるとすれば、それは著しく年をへたハタの類ではないだろうか。後半の幻獣の正体に関してはここでは言及しないとして、引用文前半を見てみたい。

ここで水木が、『日本書紀』・『古事記』に書かれている悪神と書いているのは正確ではない。なぜなら、記紀において「ヤマトタケル」は「悪魚(怪魚)」とは戦ってはいないからである。古事記では「山の神」「川の神」「穴戸神」を平定したとあるだけなのだ。

日本書紀では、クマソのカハカミタケルを倒した後の景行天皇二十七年十二月条に、

既にして海路より倭に還り、吉備に到りて穴海を渡りたまふ。其の処に悪神有り。則ち殺したまふ。亦難波に至る比に、柏済の悪神を殺したまふ。とあるだけである(注5)。これは、翌二十八年春二月条に次のように語られている。

唯し吉備の穴済の神と難波の柏済の神のみ、皆害ふ心有りて、毒気を放ちて路人を苦しびしめ、並に禍害の藪と為れり。故、悉に其の悪神を殺し、並に水陸の径を開けり。

ここで登場している「済の神」は水の神であるから、魚の姿をしている可能性はあるが、「悪魚」や「怪魚」とは明言されていない。前稿「讃留霊王伝説についての考察」の中で紹介した諸本にも、両者の関係に言及したものは無い。また「アクル」の名称も登場していない。なぜ後世において「アクル」と呼ばれるのか、語義に関しても全く不明のままである。

しかし、江戸時代に出版された『金毘羅参詣名所図会』の中に、大変興味深い記録が残っている(注6)。以下その内容を検証してみたい。

三 金比羅参詣名所図会

江戸時代に出版された『金比羅参詣名所図会』の巻之四に、この「悪魚」のことが言及されている。この本には、讃岐国の地理や伝説など、いわゆる観光名所が記されている。以下に①「魚の御堂」と②「八十八之水」の項目を引用する。

- ① 魚の御堂 坂出より三丁余南、新濱村にあり。今は僅の小堂一字なり。薬師如来を安す。伝云、往古、讃留霊公、毒魚を退治し給ふ。其の霊崇りをなして疫癘行わる。是を鎮めんが為に建る所ともいひ、又、行基菩薩、海中より上りし大魚の骨をあつめて造り給ふとも、両説いづれともに、讃留霊公が毒魚の説によれり。毒魚退治の話は次に記せばここに略す。
- ② 八十八之水 小西の庄、村の街道の傍にあり。國中第一の清水なり。水源は五丁斗左の山上にて、薬師如来の小堂あり。土人、崇徳天皇の奥の院といふ。國中に清泉多しといへども、斯る潤沢なる事なし。多くは爾雅に所謂、濫泉、汎泉の類ひにして正出のものなり。此水は彼の沃泉にして、水勢烈しく恰も滝の漲るに似たり。原来三伏の暑きには清冷にして手を斬が如く、玄冬素雪の寒きには温和にして菜をまびくも難からず。されば往来の旅客、夏日は爰に憩ひ渴を潤ほし苦熱を避け、馬士は馬を樹下につなぎて水を飼ふ。傍には西瓜、素麺、心大、美淋、焼酎などを冷して商ふ店をいだす。行人これを食して炎暑の疲れを忘る。尤も此の水源といふは、凡そ是より五丁ばかり山の奥にありて涌き出る巖穴あり。其の上に石仏の薬師如来を安置し小堂を覆ふ。伝へていふ、始めは此の小堂なく只の石仏のみなりしを、堂を営むによりて堂内の床上に安置せしかば、忽ち水止て出ず。衆人おどろきて始めの如く石上に下せば、水湧くこともとのごとし。故に此の堂内本尊の在す所は床なく水源の石上なりとぞ。実に奇異の清泉といふべし。さればにや、往古、悪魚の毒に中れる官軍を救ひ、崇徳天皇の棺を浸し奉る等の奇瑞有り。往古、日本武尊、西州の態襲を征伐の折から、吉備の穴海に（今の藤戸の事なりと云）呑舟の大魚あり。尊、出陣の時、其の行粧におそれ南海に入

りて形を隠す。余後、尊、態襲を退治し凱陣し給ふ時、大魚又還り来つて吉備の穴海の前、讃岐の稚戸に向ふて客艘の愁ひとなす。尊、是を平らげんと讃州阿野の山邑に入て大木を剪り、これを鑿て齋船を造り、尊自らこれに乗じて大魚に向ふ。悪魚しりぞかずして尊の舟を呑む。官兵おのおの銚、劍を以て大魚を斬る。是に依て魚転倒して南の方福江につく。船中の人、其氣にあたつて酔仆る。尊、一個魚腹を切割て出給ふ。これによつて国吏、邑民あつまり来りて魚をきりさき官兵を助け出す。時に一の童子忽然と顕れ、一瓶に水を入れてたづさへ来り、尊に奉る。尊これをのみ給ふに正心清明となる。すなわち問て曰、此水いづくの所に有る。童子答て、此は樵夫の休場の水なり。尊のたまわく、願わくば吾が士卒にも吞ましめ、必死を救ひ給わらんや。童子、諾して邑民を引て其の清水を汲ましめて、其の面にそそぎ其の口に呑しむ。然るに、忽ち其毒気さめて悉く蘇生す。故に、此の水を号けて八十生水といふとぞ。（按ずるに八十生、八十八、ハヒフヘホの通音なる故、八十八といふか。）又云、其時、官兵八十人蘇生せし故ともいひ、八十八人生かへりしとも云へり。（是全く付会の説なるべし。八十はものの数多きをいひて、八十にかぎるべからず。）扱、亦此の童子といへるは即ち地主横湖明神にして、王道を助け神力を加へ給ふ事仰ぐべし。尊、やがて士卒を従へて陸に上り給へば、浦人は敬して餉を奉。故に此所を御供所と云。（今、世俗略して御供所といふ。）国吏、有司群参して其の治平を悦び、万歳を唱ふ。此の時、尊の後妃、穴戸武媛、男子を産給ふ。是、武彀王なり。尊、悦び給ひて悪魚を平らげ給ふ功を武彀王の勲として、讃岐に留めて其地を守らしめ給ふ。故に国民、讃留王と称す。

日本書紀曰、日本武尊到吉備以渡穴海其処有悪神則殺之

同 二十八年春二月吉備穴濟神及難波柏濟神皆害心以放毒氣令苦路人並為禍害之藪故悉其悪神并開水陸之徑天皇於是美日本武之功而異愛

此時、彼悪魚をも退治し給ひし物ならんか、又、悪魚といへるも書紀に云悪神のことならんか。

A 因に云、北冥に魚あり。其名を「ミコラコスニユ

ス」といふ。安永年間に来し蛮人「コレーデレキシキンデラル」といへる書記、伯氏に語りけるは、僕、北海を漂泊せるとき、洋中に一の嶋あり。凡巡り三里計と覚ゆ。船を岸に着て陸へ上り見るに草木もなく河水もなし。扱、船中より鍋、釜を取よせて飯を焚、菜を煮て食し終り、其より又また船にうち乗り、二、三十里も走りける時、俄に大渦巻来る。怪しと思ひて見る程に、彼嶋きりきりと廻りて水中へ沈みたるを見て、船中の者、一驚を喫せざるはなし。是、伝へ聞く北海の大魚「ミコラコスニユス」にて、彼大魚の背、たまたま水面へ浮びしを嶋と心得、危きめ見たりとなん語りたるとなり。

- B 又、吾邦蝦夷の海底にて、時として雷の如き響き聞ゆる時、海上に船をうかべたる夷ども周章陸へ逃げ上ることあり。是、おきなといふ大魚の海底を過る音なるよし。遂に其形を見たる者なしとぞ。是らも「ミコラコスニユス」の類ひなるべし。
- C 又、蛮人南海を過る時、大なる嶋を見る。船を留めて陸に登り行く事、凡二、三里ばかり。其路、人家はもとよりにて草木、水泉あることなし。時に大風吹おこり、臭穢鼻を撲こと頻りにして堪え忍ぶべくもあらざれば、急ぎ船へ跪戻り、傍はなれて熟視れば、嶋にはあらずして大魚の死して浮びたるにてぞ有ける。斯て其臭氣にうたれたるもの本国へかへりて後、大熱を発して命をおとす。其より此病、歐羅巴洲中へ伝染す。是彼の国に於て瘧病を伝へし発りなりと。(以上、森島中良が紅毛雑話に見へたり。)

然れば、船を吞て往来を悩ます悪魚尤もあるべし。且、前にいふ魚の御堂の疫癘の説を思ひ合すに、全く魚の霊にはあるべからず。蛮人が臭穢にあたりて瘧疫を煩ひし如く、彼の殺戮せられし悪魚の腐爛せし臭穢、郡中に充満し、諸人、瘧疫を病み、終には国中にも伝染て疫癘の行われしものならん。

ここで、著者の暁鐘成は「讚留霊王の悪魚退治」と日本書紀の「日本武尊の穴済の神退治」とが同一のものではないかと言及している。これが暁のオリジナルの意見なのか、それとも誰かの説を引用したものなのかについては不明である。ただ、1847年(弘化4

年) 当時には、この考え方が存在していたことはわかる。

ただし、文章中この怪物のことは、「毒魚」「大魚」「呑舟の大魚」「悪魚」「魚」と呼称されており、「アクル」の名は見られない。

また、A~C は引用文中に書かれてある通り、蘭学者の森島中良が1787年(天明7年)に刊行した『紅毛雑話』からの引用である(注7)。『紅毛雑話』は、江戸にやって来たオランダ人から聞いた話などを、森島がまとめたもので、A・Bは巻一「北海の大魚」、Cは巻四「疫癘の濫觴」に載せられている。

以下、『紅毛雑話』所収のA~Cの内容について、もう少し詳細な検討を試みる。

四 紅毛雑話 その他

Aで語られる「ミコラコスニユス」はヨーロッパにおける伝説上の怪物であろう。しかし、この名は他では見つけることができなかった。

島のような大きな魚の伝説といえば、六世紀頃のケルト系キリスト教の聖人、クロンファートのブレンダンの『聖ブレンダンの航海』に語られる大魚「ジャスコニウス」が挙げられるだろう(注8)。

詳しい分析は次稿以降で行う予定であるが、「ジャスコニウス」の話は、島と間違えてブレンダン達が上陸し、火をたいて料理を始めると島が動き始め、船に戻ると島が沖の方へ去って行った、という内容である。Aの展開とほとんど同じである。

Bの「おきな」という大魚は、その大きさについては触れられていないが、「雷」という表現には注目される。前稿で取り上げた「讚留霊王の悪魚退治」物語の諸本の中で、『讚岐大日記本』、『豊原道隆寺本(讚留霊公胤記略)』、『中尾本(異本讚留霊記)』が悪魚の説明に「雷」を使用している(注9)。

① 讚岐大日記本

景行天皇の二十有三年、一の大魚有り。其の大きさ嶋巒の如し。其の去来電の如くして、西海に周流し、四国を匝廻す。

② 豊原道隆寺本(讚留霊公胤記略)

人王十二代景行天皇の二十二年、土州の南海に大魚有り。其の大きこと島の如く、其の形鰻の如し。

電奔雷吼、鰐口龍尾なり。

③ 中尾本（異本讃留霊記）

人皇十二代景行天皇の二十三年、西海土佐の海中に一の大魚有り。其の姿鱸の如し。去来電に似たり。

「おきな」は「雷」のような「音」がするのであるから、「去来」が「雷」とする例①・②とは異なっている。しかし、「島」のような大きさの魚の「去来」が「雷」というのは、イメージとして結びつきにくいのではないだろうか。また②の「雷吼」とは雷の音がすることであるので、「おきな」と同様である。やはり、讃留霊王の悪魚においても「雷」のような「音」というのが存在したのではないかと考えられる。

Cの内容は、「島」のような大きさの「魚」の死体から放たれた臭気によって人々が疫病にかかるというものである。そしてこれがヨーロッパにおける伝染病の始まりであると説明している。「讃留霊王の悪魚退治」においても、腹中に飲み込まれた日本武尊の部下達が「気」にあたって「酔仆」してしまい、その状態を日本武尊は「必死」と述べている。『金比羅参詣名所図会』著者の暁も最後に述べているように、悪魚の「気」は死体の「臭気」と同じと考えて良いだろうか。結論を出すのは尚早だが、今後両者の関連について検討してみたい。

このような「大魚」に関する資料は、江戸時代『絵本百物語』にも見られる（注10）。

第廿四 赤ぬいの魚

安房の国、野島が崎といへる所に、又六、佐吉とてふたりの船人あり。きわめて船の上手なりければ、風波をいとはずして大かたは出帆しつるに、ある時大船にうちのりければ、難風にていつくともなく漂流し、廿六人のりのうち三人は過て水に溺れ死しけれども、廿三人のもの共からうじてひとつの島に着岸せり。ここはいづこなるらんとみなみな陸に上りて人家をもとむれども、さらに人とはなく、只見なれぬ草木の岩の上に茂りて、多くのもくず梢にかかり、岩のひまびまには穴有て流をつたへ、魚など多くすむ所有。猶行こと二三里なれども、いぬもなく人もなし。水をもとむるにみな潮なりければ、是非なく立帰りてみなみな船にのり、

十町ばかりもはなれたりと思ふころ、彼の島と覚しきは海底に沈めり。是果して大魚也と云伝へり。

『絵本百物語』は江戸時代に作られた、いわゆる妖怪の画集である。著者の桃山人がどのようにして物語を収集したのかは不明である。従って出典がわからないお話とすることになるが、「ミコラコスニユス」や「ジャスコニウス」との類似性は見逃せないのではないだろうか。

ただし、讃留霊王の「悪魚」と「ミコラコスニユス」等との違いも明確になった。それは「船ごと吞まれる」という要素である。

巨大な怪物を退治するために、敵の体内に入るという展開は、昔話の「一寸法師」を想起させる。ただ魚に吞まれて腹中に囚われる話というなら、旧約聖書のヨナ記や『ピノッキオの冒険』が挙がるだろうが、「退治」の概念がないため、ここで同列に扱うことはできない。

五 まとめ

以上のように現代の「アクル」から古代の「悪魚」について見てきたが、いったんまとめると次のようになる。

1. 記紀のヤマトタケルに「悪神」（「穴戸神」・「穴済の神」）退治の伝説がある。
2. 江戸時代までに讃岐国の伝説として「讃留霊王の悪魚退治」がある。
3. 『金比羅参詣名所図会』に「悪神」と「悪魚」の同一化の考えが見られる。
4. 江戸時代に「大魚」の類として「ミコラコスニユス」、「おきな」、「赤ぬい」などが知られている。
5. 現代アニメ映画において「怪魚アクル」が登場し、水木しげるが「悪魚」を「アクル（悪樓）」と表現する。（前後関係は不明）

結局の所、なぜ「アクル」と呼ばれるようになったのかは不明のままである。今後さらに検証を続けていきたい。

注

- 1) 拙稿 「讃留霊王伝説についての考察」、詫間電波工業高等専門学校研究紀要37、2009年6月
- 2) 乗松真也 「「悪魚」退治伝説にみる阿野郡沿岸地域と福江の重要性」、香川県埋蔵文化財センター研究紀要8、2012年3月
- 3) 東映株式会社「わんぱく王子の大蛇退治」、演出 芹川有吾、1963年3月公開
- 4) 水木しげる 『水木しげる妖怪原画集 妖鬼化ムジャラ完全版2 四国・中国I』 Softgarage、2008年1月、(『水木しげるの世界幻獣事典』朝日新聞社、1994年が初出か)
- 5) 本文は、新編日本古典文学全集による。
- 6) 『金毘羅参詣名所図會』1847年(弘化4年)、暁鐘成著(臨川書店 版本地誌大系19、1998年11月) 本文の読み、句読点、傍線等は筆者による。
- 7) 『紅毛雑話』 森島中良、1787年(天明7年)、早稲田大学図書館古典籍総合データベース利用
- 8) 『聖ブレンダンの航海』については、原典等は未確認のままです。インターネットホームページ「聖ブレンダンの航海ホーム」curragh.sakura.ne.jp の内容を参考にさせていただきました。
- 9) 本文の読み、句読点等は筆者による。
- 10) 『絵本百物語』1841年(天保12年)、桃山人著 竹原春泉画(株式会社KADOKAWA 角川ソフィア文庫 『桃山人夜話 絵本百物語』電子版、2014年7月)